

# 片上伸はいかにロシア的なるものを考察したか<sup>\*</sup>

小林 実<sup>\*\*</sup>

## はじめに

島村抱月の門下で自然主義を代表する評論家として知られる片上天弦こと片上伸が最初にロシアへ留学するのは、大正四年（一九一五）十月から同七年（一九一八）三月までのことであるが、これはちょうどロシアの二月革命（一九一七年三月）と十月革命（同十一月）をあいだにはさむ時期にあたる。まさに革命下のロシアを、彼はその五感をとおして、じかに体験するのである。

この片上のロシア留学を詳細に研究したのが、柳富子の「片上伸のロシア体験——第一次留学を中心に」（『比較文学年誌』一九八五年、のち『トルストイと日本』に所収）であるが、その模様は、およそ次のような特徴をもっていたと説明されている。

単に旅行者が、珍しい見聞を伝えるというようなことではなく、それらの見聞をどう研究と結びつけるか、あるいはその見聞を知識によってどう意味づけ、体系づけるか、またこれとは別に、文献を通して学んだものをどう現実のなかで確認するか、そしてその相互作用は、たえず、活発に行なわれていなければならないはずだが、おそらく、こうした問題意識は、片上の脳裡を片時も離れることはなかったに相違ない。（注一）

そもそもこの留学の目的は、早稲田大学にあたらしく露文科を設

置するにあたり、文献蒐集と本場での学問情況の調査、とくに片上本人がロシア文学史を体系的に学びなおすことにあった。当初は首都ペトログラード（一九一四年にペテルブルグから改称）に赴き、二週間そこでモスクワにひきうつっているが、この性急な移動については、ペトログラードには近代文学の教師がいまいといわれてモスクワへうつったという経緯から、『古典をまず学んだのち近代文学を、という気持ちだが、片上にこのような行動をとらせたもの』（注二）だと考えられている。

さて片上のロシア体験にかんする柳の見解は、『（…）ロシア的なものにじかに触れ、ロシア人の性格を仔細に観察し流動するロシアの現実を目のあたりにしながら、単なる目撃者、経験主義者に止まらず、いかに深くロシア的なるものを考察し、また、この革命を歴史的に遡って、その必然性を洞察したか（…）』（注三）ということばに端的に示めされているように、ロシアの現実を目の当たりにした片上は、しだいにロシア文化の歴史的固有性にめざめていったとするものであるといえよう。これは、帰国直後の片上は、「ロシア精神の発露としてのポリシェキーズム」や「ロシア魂の神秘」といった、ロシア的精神の独自性を強調する論文を発表しているところから当然考えられる帰結である。そのひとつの証左として柳は、もともとドストエフスキーに関心のつよかった片上は、おなじくドスト

エフスキー作品をとおしてスラヴ主義的思想家となったニコライ・ベルジャーエフの著書『ロシアの魂』に当地で出会い、彼自身の論文に利用していることを指摘している（同、三一八―三二〇頁を参照）。

このように、片上は現地をおとずれることで、ロシアのナショナリズムに接近し、帰国後は自らそれを代弁する身振りをとるようになるわけだが、では彼はじつさにロシアでどのような現実に触れたのか。そのあたりの事情が、柳論では、いまだ明確ではない。

後述するように、帰国後のロシア革命に関する彼の言説は、後述するように、同時代にあつてはいち早く、それをロシアの文化的特性のうちに位置づけている。そこには単にベルジャーエフの書物に出会ったというだけでは片づけられないような、深い体験の質があると推測される。

幸いに、片上はロシア革命によって帰国するまでの過程を詳細に述べた「ロシアを去るまで」という文章を『東京朝日新聞』大正七年（一九一八）四月十六日から五月十三日までの約一ヶ月間、十六回にわたって断続的に発表している（のち『ロシアの現実』至文堂、一九一九年五月所収）。以下本稿では、それを読み解きながら、彼がどのような体験のなかから、ロシア革命の本質をロシア文化の特性とむすびつけるに至ったのか検証してみたい。

なお「ロシアを去るまで」の引用については、新聞掲載の月日のみ記載することとする。

## 一 認識のずれ

「ロシアを去るまで」のなかで片上は、再三にわたって、思いも

よらなかつた事実を知らされた驚きを報告している。

引上げて後、イルクーツクに着くまで、吾々は日本で何が起つてゐるか一向知らなかつた。日本で出兵論が一時あれ程の大問題になつてゐようなどとは思ひもよらなかつた。〔…〕日本での出兵論の様子などを聞くに及んで、さてはといふやうな気もしたが、新聞を通して見る世論の調子の大袈裟なのが、馬鹿々々しいやうな可笑しいやうな気もした。

（四月二十一日）

ロシア革命の騒乱にたいする干渉戦である、シベリア出兵を日本がおこなうのは、この年の八月にはいつてからだが、すでに年の初め頃から、この問題に関する噂は、日本国内では民間でもさかになり出していた。原暉之によれば、大正六年（一九一七）の十一月末ごろまでには、日本の参謀本部は「居留民保護の爲極東露領に対する派兵計画」を策定していたとされている（注四）。

一月に開会されていた第四十議会で寺内正毅首相は、『抑東洋の平和を維持するの責任は繋りて帝国の双肩に在ります其れ故に戦禍延て極東の平和を紊し累を帝国に及ぼす場合には進で機宜の措置を取るに躊躇しないのであります』（『東京朝日新聞』一月二十三日、傍点原文拡大）と明言し、これにたいして東朝記者は、『國民に向つて一大警告を与ふる者と解するを得べし』と論じている（同）。

こうした日本国内の世論の動向は、モスクワ在住の片上の周囲には伝わってこなかつたようである。にもかかわらず、日露関係の緊迫感が及ぼす影響は、片上の思惑を越えて、彼に迫ってくる。

自分がモスクワへ行つた当座、知りあひになつたり世話になつたりしたモスクワ大学の教授や助教授たちは、日本では政府や政府の学校からばかりでなく、民立の学園からも外国へ留学

生を出したりするといふことを知つて、いかにも特異な羨ましい制度のやうに自分に話した。それと同時に、戦争中に文学の研究などといふ目的で日本から来たといふことを如何にも特別な珍らしい不思議なことのやうにも言つた。日本から文学研究に来た、日本でロシアの文学が読まれるといふことを、さきにも不思議な意外なことのやうに言つた。そして、ある教授の如きは、冗談半分にはあるが、君はやはり政府から派遣されたので、文学の研究以外に何か特殊の使命を帯びてゐるのではないか、さうでなくては、此戦争中に、事もあらうにロシア文学の研究に来るなど、いふことは、日本人のやること、してはとうも腑に落ちかねるといふやうなことを自分に向つて言つたりした。

(四月十九日)

ここにはさまざまな認識のずれが認められる。まず当時ロシアは第一次世界大戦に参戦中で、実際に西部戦線では多くの兵士が戦つてゐる。戦時中であるという意識からすれば、片上の留学目的も、同盟国である日本による対独工作かなにかの一環ではないかと、まず考えるのが妥当であろう。日本ももちろん参戦国のひとつであるが、戦時中であるという国民の認識の薄さは、ここからもうかがえる。また日露戦争以後、日本で急速にロシア文学への関心がたかまつたという事情が、ロシアにまで伝わってゐなかつたこともわかる。ロシア側からすれば、まったく意外な客人の訪問だつたにちがいない。

いっぽう片上からみれば、自分は純粹に早稲田大学の教授として文学研究を目的に来たにもかかわらず、冗談半分とはいへ、軍事目的とつたがわれたことにとまどつたことだろう。彼のおかれた状況

は、日本とロシアの差異だけでなく、日本政府と民間文学者との差異も背負つていて、それらのずれが、彼に思わぬ驚きをもたらしているのである。

すでに日本でシベリア派兵が議論される以前から、ロシア国内では、非戦ムードのたかまりから、ドイツと単独講和をおこなつた場合を想定して、日本の大陸進出を危惧する噂がひろまつていたようである。片上は、モスクワを引き上げる半年ほど前に、アストラハンやニージニー・ノヴゴロドなどの地方を旅行して、そこでこの噂に触れている。

モスクワへの帰りにニージニー・ノヴゴロド市へ寄つて、電車の中でベデガーの案内記を出して市の地図を見てゐたら、乗客の一人が頻に自分の方を迂散くさうに見てゐたが、仕舞ひに到頭立ち上つて来て、失礼ですがとも何とも断りなしに、一体君はこの町の地図を取つてどうするつもりですと詰るやうに言ふ。少々驚いたが、自分は別に地図を取つてはゐない、土地に不案内で短時間に見物せうとする旅行者だから案内記の地図を見てゐるだけだ、一体君は何でそんな無礼な質問をするのか、自分は日本の一旅行者に過ぎないと言ふと、さアその日本人だからこそ君の様子を注意してゐたのだとますます怪しからんことを言う。「……」さうさ、君の方ではシベリアへ兵隊を出してウラル近くまで占領したといふぢやないか、その上まだこの辺までも来るつもりなのかと、だん／＼迫き込んで来る。自分は、あ、またこ、でもウラル占領の話かといふ氣がして、可笑しくもあり氣の毒にもなつた。

(四月二十日)

日本軍がシベリアに上陸してウラルまで占領したという記事が新

聞に掲載されたということで、反日感情が急激にもりあがったところへ、遭遇してしまったのである。もちろん片上からすれば、突飛な空想であり、とても本気でうけとめることはできない。《可笑しくもあり気の毒にもなつた》と考えるしかない。

しかし日本軍のシベリア進出の風説は、まったく根拠のないことではなかったのである。日本を離れている片上は、そのことを知らないでいる。

〔三〕 去年の夏以来日本がシベリアに出兵するといふ風説は、何度モスクワその他各地の新聞に出たか知れない。これも夏頃のは或は単に国内の非戦論者への脅しのためであつたかも知れぬが、去年の秋からこつちへかけての極東特派員の電報や通信には、今にも日本がウラジヤストクを占領しさうだとか、いや既に日本の軍艦は幾艘とか入港して軍隊は上陸したとかあつて、それがレーニン政府の聯合國へ対するやり口から考へて、いかにもあり得ることらしく考へられて来た。日本のことなら勿論その位のことはいさうなことだと思はれて来た。

(四月二十一日)

じつは一月十二日に、イギリス軍艦一艘と、日本軍艦二艘が、居留民保護を理由にウラジヤストクの金角湾に入港しており、この報道はまったく根も葉もない噂ではなかった。また、片上が帰国した直後の四月四日、ウラジヤストクの石戸商会に強盗団が押し入り、日本人一族が殺傷されるという事件がおき、翌日には瞬く間に日本とイギリスの陸戦隊が上陸するという事態にまで発展している。ここから察するに、日本のシベリア占領はなされていないにしても、ウラジヤストクは、いつそうなつてもおかしくはない気配につつまれており、そうした空気がウラル占領などの風説をもたらししたもの

と思われる。

しかし日本の情勢から切り離されてモスクワに在住する片上にとっては、これらの報道や風説も、ロシア人の日本にたいする誤解のひとつだというくらいにしか認識されていない。

## 二 とまどい

ドイツ軍がいつ侵入してくるか分らないからという理由で、モスクワの日本領事館は市内にいる日本人に、引き上げ勧告し、片上もそれにしたがって帰国の途につく。この日本人の行動が、ロシア人の大きな疑心を招いたことを彼は報告している。

立つ前には、懇意にしてゐたロシア人のところへ出来るだけ暇乞ひに廻つた。案外に皆平気な顔をしてゐた。とう／＼君の国とまた戦争することになりましたね、など、言ふ人があつた。さうまで露骨に言はない人たちは、何しろ今の政府はロシア国民全部の信望を負うて立つてゐる政府ではないのだから、日本の政治家がそこをよく考へて、慎重に事を決して貰ひたいものであるなど、言つた。大抵の人はあまりその問題に触れないで、平気な顔をしてゐた。しかし其沈黙と平気らしい顔とは、今度の居留民引き上げがたゞ事ではないなといふ心持ちを語つてゐた。

(四月十六日)

引き上げ当初は、実際に戦地の混乱をいくぐつての避難というわけではないため、日本人たちのあいだでは切迫感がどうしても感じられず、むしろ自分たちがおかれた情況に違和感すらおぼえていたようである。《全くのところ、万国寝台会社の客車を買ひ切りにし



て護衛の兵卒をつけて貰つて揃つて引き上げて来はしたものの、何だか大袈裟過ぎるやうな氣もした。いよ／＼切迫つまつて引上げるのでなくて、何でもないことに引き上げつゝ、あるかのやうな氣持があつた。要するに居留民の引き上げといふ程の緊張した氣分がなかつた。(四月二十一日)というのが、正直な感想だつたらしい。

それでも、《シベリアに入るにつれ、そのシベリアも極東に近づくにつれて、沿道の住民の日本に対する不安の度のだん／＼強くなつて行くのが分つた》(四月二十三日)。これには、東へ行くほど日本に近いという地理的状況や、現にウラジオストクに日本をはじめとする諸国の軍艦が入港していたり、沿海州地域には日本の後ろ盾をもつた反革命派のセミヨノフ軍の勢力があるといった実情が、大きく左右していたであらう。しかしながら、シベリアを移動する片上一行じたいが、この沿線の不安を煽つていたという事実もある。彼らの乗り込んだ客車の窓には、「モスクワ日本領事館のための特別客車」とロシア語で書いたものが貼りつけられ、《沿道の停車場毎に土地の農民や兵士や労働者などはそれを読んで日本人が悉く引上げて行く、これは日本とロシアとの間に何か事が起るのではないかといふ風に思つたらしい》(四月二十三日)。

この時期に日本へ引き上げていった日本人はほかにもあつたが、片上たちよりもひと月ほど早く南ロシアから帰国した、参謀本部付歩兵中佐荒木貞夫が、下関で待ち受けていた新聞記者にむかつて、《(ロシアの——引用者注)政府当局者は素より、国民も日本に注目する事非常のものにて、日本軍が浦塩やハルビン(ハルビン)を占領したなどの記事が、新聞のみか公報に迄出て居る。こんな具合で日本人に対しては、何となく恐ろしいものにでも触れるやうにして居るので、帰りの汽車中でも案外善い待遇を与へて呉れた》(『東京朝日新聞』二月

一日、句読点引用者)と語っている。さすがに片上らは、このように無邪気ではいられず、とまどいの氣持ちを隠せないでいる。

客車に貼られた紙をはがそうという提案が出されたが、《沿道の住民だけならよいが、吾々の列車の四等車には兵士等も大勢あるから却て妙に思はれても具合が悪いといふ、妙に行き届いたやうな説が出て、結局モスクワの領事館で貼りつけてくれたまゝになつた》(四月二十三日)。

また彼らと行動をとともにしていたブラウンというアメリカ人が、停車場にあつまつて来る土地の農民たちに、日本軍がウラジオストクに上陸してハルビンまで占領したというような流説をふりまいていたことが發覚する。

この人物は、片上一行と同乗したアメリカ領事ジェンキンスがチタで下車していなくなつたあと、なにかとアメリカ領事を騙つていたのだが、本業は新聞記者とも弁護士とも称して、周りからはうさ／＼くさい人物だとみられていた。ボルジャで彼がこうした流説をまいていることが明らかになり、一行が抗議してから、このような真似はつしんだようであるが、《何にしてもシベリヤも極東に近づくにつれて、アメリカといふものが段々日本と対照して受け取られてゐることを感ずるやうになつた》(四月二十三日)と片上はのべている。

日米が共同でシベリア出兵に乗り出すのは、この年の八月であるが、周知のとおり、かならずしも両国は以前から親密なわけではなかつた。ロシア革命期の日米関係については、和田春樹が次のように端的にまとめているので、ここに援用する。

ロシア革命は日本にとつても米國にとつても同盟國、ともにドイツと戦っている國で起つた革命である。そこで親独的な

ツァーリを除去した二月革命が大いに歓迎されたのは当然だった。やがて十月革命にいたり、ボリシェヴィキ政権が誕生するに及んで、事態は激変する。日本は早々に干渉出兵を考えるが、アメリカはすでに日本に対して警戒的である。日本はドイツ領青島を攻めたのに続いて、山東半島を占領し、中国に対して二一カ状の膨張主義的要求を突きつけていた。朝鮮からも米国人宣教師たちが日本の植民地支配の実相を伝え始めていた。アメリカは日本の動きを抑制しようとした。(注五)

この和田のことは傍証するかのように、片上は不審なアメリカ人の動向を目撃するとともに、極東に近づくほど、反日親米の世論を肌身に実感しているのである。ちょうどこの片上の文章が掲載された前日の『東京朝日新聞』四月二十二日の国際欄には、「米国対露飛躍」と題して、ハルビン特派員が入手したシベリアにおける米国の動静を伝える記事が掲載されている。

そのなかに、「米国は露国の望むまゝ、に其無限の資力に依りて鉄道諸材料を始め各種の機械を惜まず提供し西伯利各種の利権と交換しつゝ、あり」であるとか、「西伯利各都市の重なる言論機関を買収し巧に米国に依頼するの利益なることを露人に信ぜしめつゝ、あり」といったことが書かれており、また「西伯利に於ける米国の今日の敵は独り日本あるのみ然れば事毎に日本の行動を妨害して止まず浦塩上陸等は米人の思ふ壺に嵌りしものにて米人は背後に在りて日本は西伯利占領の野心あるが如く吹聴し露人の反感を煽り日本の勢力の西伯利に侵入するを防遏しつゝ、あり」と読者の反米感情をあおっているのである。

しかしながら、少なくとも「ロシアを去るまで」という文章のなかの片上一行、すなわちシベリアを通過中の彼らは、当地の世論と、

自分たちの抱いている実感との隔たりに、とまどいの色をみせている。

吾々は随分迂闊でもありノン気でもあつたわけだ、少なくとも自分はイルクーツクやマンジュリアで日本の新聞を借りて見て、日本で号外が出たり、ハルビンあたりの日本新聞が大使一行の国境突破とか何とかまるで戦場からでも逃げて来たやうな大層な記事を書いたりしてゐるのを見ては、甚だすまないが可笑しいやうな揶揄したいやうな気がした。しかし日本の新聞の調子を見ると、吾々にさへ何か知らぬが大事の起る前のやうな気もされる。

(四月二十三日)

じつはこの文章と同日の別の紙面には「引揚げて来た女子供——顔色憔悴して露国から／＼市で殺された二邦人の／＼妻涙ながらに惨状を語る」と題する記事が掲載されている。アムール河(黒竜江)をはさんで中国国境に接する町ブラゴヴェシチェンスクで、三月九日および十二日に、革命派と反革命派の武力衝突があり、在留日本人のあいだに死傷者の出た模様が、敦賀まで引揚げて来た遺族の談話によつて紹介されているのである(注六)。

この事件については、原暉之「シベリア出兵——革命と干渉1917—1922——」(筑摩書房、一九八九年六月)が詳細に論じているが、それによると、当地では日本陸軍の諜報活動により、カザーク軍を中心に反革命勢力の決起を促すとともに、武装した日本人居留民をふくむ自衛団が結成され、やがて革命派と全面衝突する事態に発展した。はじめ九日の衝突では、革命派の立て籠もる海軍根拠地にたいして、反革命軍が総攻撃をおこなったが、革命派の予想外に手強い反撃をうけて、一時休戦がされた。ところが十二日未明、

今度は革命派が艦砲の掩護のもとに出撃し、停車場を占領した。戦鬨は激烈をきわめ、カザーク兵の投降、カザーク連隊本部と自衛団、日本人義勇団の黒河への敗走により、革命派の勝利に帰したのである（以上、同書一八〇〜二〇一頁参照）。

原の研究では、前掲『東京朝日新聞』の引揚者に関する記事について言及はないが、これは十二日の戦鬨における日本人義勇団戦死者の遺族の証言を掲載したものである。

それによると、戦死した幾田泰三<sup>やすみ</sup>なる人物は、予備役の上等兵で、対岸の黒河で貸座敷業を営んでおり、当日の戦鬨で負傷して、病院に収容されていたところを引き摺りだされて射殺されたとされている。原によれば、在留邦人の数名が特務機関の機関員となっており（同書一八五頁）、また日本人義勇団は予備役を主体として編成されていたということなので（同書一九八頁）、この幾田は、諜報員として活動していた嫌疑から、かような死に方をしたのではないかと思われる。

この事件が起きたブラゴヴェシチェンスクは、アムール鉄道の支線に位置する町であるが、じつは片上ら一行は、この革命派に占拠された駅は通過していない。

当時のシベリア鉄道は、チタ近郊のカルムイスカヤから、北へ向かってハバロフスクを経由してウラジオストクにいたるアムール鉄道と、中国東北部（満洲）にはいつてハルビンを経由してウラジオストクにいたる中東鉄道（旧東清鉄道）に分かれている。片上たち一行は、この中東鉄道のほうを使ってウラジオストクに向かっているのである。

彼らは三月十八日にカルムイスカヤを通過しているので、事件より一週間ほど遅れて中国国境の満州里に到着したと思われる。それ

までに彼らがブラゴヴェシチェンスクの事件のことを知っていたかどうかは、管見のかぎりではわからないが、満州里やハルビンでの日本の新聞報道に接して、ようやく、《何か知らぬが大事の起る前のやうな気もされる》と感じている様子から、それまでは日本側とはことなる雰囲気<sup>きふき</sup>のなかを旅していたことがわかる。

ちなみに、日本陸軍の参謀本部は、ハルビン、満州里、イルクーツク、チタ、アレクセーエフスク、トムスク、オムスク、チチハルに諜報勤務の将校を派遣しており、ハルビンの黒沢準中佐が、各地機関の統一指導にあたっていた（前掲原一七六〜一七七頁）。また満州里では、日本の後押しを得ている反革命派のアタマン・セミヨーフが軍を編成している（同一八六頁）。つまり、片上たちは中東鉄道に入ること、日本の息のかかった地域に飛び込んでいったわけである。

そして、満州里に着くなり、突如として空気がかわる。

### 三 個人として

それまで彼らを護衛してきた赤軍派連隊所属の兵士二名が、突然セミヨーフ軍に拘禁されるという事件がおきた。

「……」この二人の兵卒は、相当教育もあり、礼儀もあり、吾々に対しても慇懃丁寧で、その託せられた任務をよく果した。殊にそのうちの一人は本職が園丁で、心のやさしい素直な遠慮深い青年であつた。彼は再びモスクワへ帰らないでどこか極東で日本の方で何か仕事でも見つけたいといふやうな望みで、一行の中の一二の人に頼んだりしてゐた。吾々の一行は、ポリシエ<sup>ポリシエ</sup>の仲間とは言ひながらこの二人の兵卒の質のよいのを愛し

てゐた。

(四月二十六日)

さつそく彼らは、セミヨーノフ軍の本営へ、この二人の青年を釈放してもらふよう嘆願に向かった。すると事情を聞かされた本営の参謀長は、『あの二人の兵卒がボリシエキの仲間であるにしても言はるゝ如く政治上特にその派の思想を固持するといふでもないやうなら、勿論放免してモスクワへ帰還させよう』と請合つてくれたものの、司法部の裁可なしに放免するわけにはいかず、しかもちょうど司法部の主任が帰宅したところであつたことから、即刻の釈放はかなわなかつた。そこでかううじて二人に面会させてもらうことになつた。

暗い、倉庫でもあるやうな建物の二階の一室は、会計係の室らしかつた。そこへ蒙古人らしい兵卒に引つ立てられて、吾々の二人の兵士が悄然としてやつて来た。吾々は道中これまでの世話になつた札を述べ、謝金を会計に委託して置くことを告げ、放免されるやうに参謀長へもよく依頼して来たことを話した。園丁の方の兵士は、泣いて自分の政治などに関係するものではないことを懇へ、同じ営倉に拘禁されてゐるものどもの話すやうな、恐ろしい最後の運命だけは免れたいと言つて、嗚咽して容易に止まなかつた。吾々を案内した大尉も涙ぐんで、煙草をすゝめたりして彼等を慰撫した。

(同)

片上は東京のアドレスをあたえて、あとで様子を知らせるようにといひ、満州里に残る者は、ハルビンの日本領事館を通じてさらに交渉を重ねることを約したが、帰国してこの文章を書いている片上のもとには、いまだに二人の消息は聞こえてこない。

二人の兵士の釈明や本営の応対を、どの程度信頼してよいかかわらないが、ここで紹介されているロシア人たちの様子は、赤軍か白軍かというような共同体の枠組からは少し離れ、個人的な顔をのぞかせている。片上たちが二人の兵士に同情をよせるのも、彼らのそうした個人的な素顔を愛したからであつた。

思えば片上たちのおかれた状況も、これら個人的な素顔を垣間見せるロシア人たちと、さほど変わつてはいない。

「モスクワ日本領事館の爲めの特別客車」という貼紙と護衛の兵士に守られて、大日本帝国という共同体の傘下にあることで、比較的平穩な移動をおこなうことができた彼らであるが、そのいっぽうで、背負わされたその看板のために、沿道の人々の気持ちを、いたずらに騒がせてしまつてゐることにとまどいを隠せないでもいた。国家の庇護のもとでの安寧と、その国家によつて引き起こされてゐる周囲の騒擾とのギャップに驚き、あきれてゐるのが、片上たちの素顔であつた。

彼らにとつても、またセミヨーノフ軍に拘禁されたふたりの兵士たちにとつても、好むと好まざるとにかかわらず、周囲からは「日本人」であるとか、「赤軍兵士」であるといったそれぞれの属性によつて、処遇が決定されている。この属性は、本人の思惑では如何ともしがたい拘束力をもつており、例えば、赤軍兵士であれば、最悪の場合、これがために処刑されることすらあり得るわけである。

片上にしても、安全な旅行が保障されるという点では恩恵をうけているかもしれないが、同様の恩恵を得られないロシア人たちのことを思えば、素直に喜ぶことができない。

モスクワを去るにあつて、友人や知人に別れの挨拶に出かけた先々で、彼はこの如何ともしがたい状況に心を痛めてゐる。

トルストイ博物館の管理者、前のトルストイの秘書ブルガーコフ君と、その見張り番をしてあるイワンといふひがら眼の爺さんとに暇乞ひに行つた時、出口のところではブルガーコフ君が、自分に言ふでもなくイワン爺さんに言ふでもなく、日本とロシアとの関係はどうならうと、吾々は友だちであると言つた時にも、自分は何だかすまないやうな気がした。自分もやはり日本人の一人として、ロシア人の前に、気の毒なやうな、すまないやうな気がした。

(四月十六日)

ロシア人であるとか日本人であるという前に、彼らは単なる個人として友人どうしでありたいと願っている。しかし、それでも彼らは「日本人」であり、「ロシア人」であることから逃れることができない。逆にいえば、この抜き差しならない彼我の違いに、いたるところで直面した片上は、自分が「日本人」であることと、彼らが「ロシア人」であることを、まざまざと思い知つたであらう。柳富子が指摘する、スラヴ主義的思想家ベルジャーエフへの傾倒の背後には、単に書物の上からの問題ばかりではなく、こうした実際的な体験があつたのである。

例えば、すでに彼は地方見学中に、次のような場面にも遭遇している。

日露戦争のときには、兵隊が何故戦争するのか分らぬと言つて、「何うでもよい」といふやり口で甚だ気乗りがしなかつたが、今度のは違ふといふ話を此方へ来て後も度々聞いたが、多少の例外もあるやうな風な話なのである。ロシアの百姓といふのは訳が分らないし、気象が第一「何うでもよい」といふ風なのだからとニコリスキー君が言つて、この中には未来の兵隊さ

んはゐないかねと三人の若い衆の方へ話しかけると、何れその中取られませうといふ。間もなく三人は勘定して出て行つた。薄暗い隅の百姓が自分に向つて、日本は廿年前には支那と戦争して勝つ、十年前にはロシアと戦争して勝つ、今度はドイツと戦争して勝つ、一体どこまで勝つてどこまで取ればよいつもりですかと言ふ。それを聞くとニコリスキー君が慌て、吃りながら、その百姓に、この人は戦争のことなど少しも知らない人だからね、日本はたゞ已むを得ず戦争したのさ、誰だつて好きで戦争するものはないからと言ふ。(注七)

(「ヤドロウ村の一日」)

日本のナシヨナリズムをなじる百姓にたいして、片上の友人で工兵少尉のニコリスキーという人物は、「日本はたゞ已むを得ず戦争したのさ、誰だつて好きで戦争するものはないから」といつてなだめている。ということは、ロシアの庶民も好きで戦争しているのではないということだ。ニコリスキーが片上にむかつて、「ロシアの百姓といふのは訳が分らないし」といつて弁解する言葉も、いいかえれば、百姓には百姓の意見があつて、インテリにはわからないのですよといった意味にもとれよう。つまり、ロシアは国家の言説が一枚岩ではないという証拠である。

片上はこのロシアの百姓が語るホンネの部分に注目して、やはり今度の戦争も、かつての日露戦争のとき同様、庶民は好き好んで戦っているわけではないらしいと察知する。ロシアの「公」の側面とはことなる「私」の領域が、庶民の視点に立つと見えてくることを、この報告は示している。

そしてインテリである片上の知人たちも、国家の論理によつて硬直化することなく、「私」の領域でのきずなを大切にしようとしてい

た。革命の混乱で片上がロシアを引き揚げようとするとき、トルストイ博物館管理人のブルガーコフが彼に、『日本とロシアとの関係はどうならうと、吾々は友だちである』と言ったことは、すでに紹介したとおりである。

#### 四 とまどいに裏打ちされた関心

帰国直後の四月に、大隈重信邸でひらかれた大日本文明協会時局問題研究茶話会で、彼は「ボリシェヴィズムに就いて」と題する講演をおこなった。そのなかで彼は、だれよりもいちはやく、ボリシェヴィズムは単なるマルクス主義の一派ではなく、スラヴ主義の変形であると指摘している。

無論御断り申すまでもなくリエーニン一派は、スラヴ国粹主義者の持つて居つたやうな考へを有しては居りませぬ。宗教を基礎として文明を説くものではありません。即ちスラヴ民族の思想文明が将来西ヨーロッパの文明に代つて起ると云ふやうな考へは有して居りませぬ。寧ろ彼等の思想は其の起原を言へば西ヨーロッパから輸入されたものである。さういふ点からは比較にならぬのでありますけれども、唯非常な抱負を以て世界に臨むといふ態度や意気込みに於いて、又気分について、大変よく似て居ると思ふのであります。「…」そこが如何にもロシア的であつて、さうして突飛である。それから遠大な抱負を懷いて周囲を顧みずして突進するところは、スラヴ国粹主義者の昔からの思想、やり方に大変似た点がある。「…」従つてボリシェヴィズムは唯の外国の社会主義思想の受売でない、やはりロシアの国民性に根ざして居る現象であると考へられるのであります。

す。(注八)

ロシア革命にたいする彼の問題の立て方は、ボリシェヴィズムの有効性であるとか、その日本への影響ということではなく、それがいかに「ロシア的」現象であるかということに的が絞られている。ここに彼の関心のありかがうかがえよう。

さきに、片上が『単なる目撃者、経験主義者に止らず、いかに深くロシア的なるものを考察し』たかという柳の言葉を引いたが、まさに彼は、『単なる目撃者』では止らず、『深くロシア的なるものを考察』してしまっているのである。つまり、「ロシア人」であるとか「日本人」であることが彼にあたえた違和感やとまどいの場面に踏みとどまることをせずに、「ロシア的なるもの」へと沈潜していこうとしているのである。

もし仮に、ここで自分が「日本人」であるということを忘れて「ロシア的なるもの」に目を奪われてしまうとすれば、彼はやがてくるスターリン主導によるソ連のナショナリズムに加担することになるだろう。やがてソ連が国際社会に承認されて、日本でもマルクスレーニン主義が左翼運動の重要な側面を担うようになってくると、文芸評論家としての片上も、プロレタリア文学運動を擁護する「同伴者」としての立場に傾いていくことを知っている我々としては、留学直後の彼の言説に、親ソ派的傾向を読みたくなるが、もちろん、現時点での彼は、新聞に『自分もやはり日本人の一人として、ロシア人の前に、気の毒なやうな、すまないやうな気がした』と書いているのであり、抜き差しならないナショナリティに対するとまどいの記憶を、たしかにもっている。その記憶に裏づけられた「ロシア的なるもの」への関心であることを、やはり見落としてはならない。

## 注

一 柳富子『トルストイと日本』早稲田大学出版部、一九九八年九月、三〇七頁。

二 柳、前掲三〇〇頁。

三 柳、前掲三〇七頁。

四 原暉之『ウラジオストク物語』三省堂、一九九八年九月、三〇六―三〇七頁を参照。

五 和田春樹『日露関係とアメリカ 1855―1930』(中村喜和・トマス・ライマー編『国際討論 ロシア文化と日本』明治・大正期の文化交流) 彩流社、一九九五年一月所収、引用は同書二五頁。

六 《敦島定期露国義勇船シンビルスク号は、船客百七十余名を乗せ、二十二日午前十一時敦賀に入港せり。是等引揚邦人の大部は女子供にて、顔色憔悴見る影もなき有様なり。其中中市引揚の婦女は、熊本県天草の人末本虎一氏が／▲団長として／一行を統率し居れるが、プ市の動乱の際、過激派の爲め惨殺され悲惨なる最期を遂げし幾田泰三、若松仁太郎の遺族もあり。幾田の内縁の妻森しげは言ふ。『夫泰三は新潟県深才村の者で、後備上等兵で、プ市で貸座敷業を営んで居ました。三月十二日に露助の爲め殺されたので、夫が殺されたと云つて、私の避難して居るプ市の対岸黒河の居留民会に、夫の死骸が届きましたから、早速行つて見ますと、顔も胸も宛で蜂の巣のやうに／▲滅茶々々に／突き刺して、二目とは見

られない酷い殺されやうでした、後で聴いて見ると、何でも夫が黒河からプ市へ応援に行つて停車場で過激派の爲に射撃されたといふ事でした、夫で直ぐ病院に入れられましたが、過激派は之れを引摺り出して惨殺したのださうです。在留邦人から三千留の弔慰金を貰ひました』又若松の妻札江は、夫の遺骨を抱へ、今年生れた許りの長男博を／▲膚に入れて／長女国枝(五才)の手を引きつ、涙ながらに語る。『二月末頃から余り見受けない人がプ市に入込んで来て、日本と露西亜が今にも戦争をすると言触らし、其内に彼んな騒動が持ち上がり、夫も自衛団に関係した爲め、九日の戦闘で過激派の爲め惨殺され、氣も転倒せん許りに驚き二人の子を抱へ、何うして行くかと心細く思つて居ります』尚イルクーツク引揚邦人中、年齢四十歳許りの貧しき風体の盲人が、五歳許りの男の子に手を引かれ居たるが、同人は語る。『私はイルクーツクで洗濯屋をして居ましたが／▲今度の騒動／があつて以来、チタ市の掠奪に次で、バイカル附近の隧道破壊、又は二千の独逸俘虜武装兵が、過激派と共にイルクーツクの日本兵を虐殺するといふ恐ろしい風説に驚愕した余り、片方丈残つて居たのが両方共潰れたのです』(敦賀特電)《東京朝日新聞》四月二十三日、ママルビを付した箇所以外の句読点は、適宜引用者が補つた)

七 片上伸『ロシアの現実』至文堂、一九一九年五月初版、一九二〇年九月四版、二七頁。

八 片上、前掲三六九―三七〇頁。

\*How did Noburu Katagami consider the thing which was Russia-like?

\*\*Minoru Kobayashi (Japanese Language and Literature)

キーワード 片上伸 ロシア革命